

三浦梅園の会易論

五郎丸 延

第一節 はじめに

三浦梅園の思想は、周知のごとく難解な術語で表現される。たとえば、△条理▽、△反観合一▽、△会易▽、△性体気物▽、△天神本神▽など。とりわけ△会易▽は、決して「陰陽」とは表記されない。

(1) 蓋し会易の目は易において始めて見ゆ。然して其の謂う所は、或いは道と曰い、或いは儀と曰い、或いは文と曰う。易を説くに於いては則ち然りと雖も、これを天地に観るに於いては猶靴を隔てて痒を搔くがごとし。阜を加えて地の日に向背するを呼ぶ。借りて別に義を生ず、此に関わる莫かれ。(『与弓崎美忠書』)

(2) 蓋し斯の述(Ⅱ『玄語』のこと)一一の条理に由りて以って則ち天地に取れば、則ち敢えて古えと計校せず。造語已よりすること有り。……或いは其の名を命するや新たに、或いは其の義を取るや殊なり。(安永本『玄語・例旨』第一条)

△会易▽は、

(3) 一一は会易の未だ各名有らざるなり。会易は一一の已に各名有るなり。(『与弓崎美忠書』)

と定義される△一一▽である。梅園の術語を使用すれば、△会易▽と△一一▽は△異声同主▽の関係である。

(4) 声は名なり、主は実なり。主は天なり、声は人なり。(安永本『玄語・例旨』第八条)

△会易▽とは人が名づけたもの、本来は天的な△一一▽である。この定義は、

(5) 名無し、天地の始めには。名有り、万物の母には。(『老子・上篇』第一章)

を想起させる。

本稿は、三浦梅園の基本的論理思想の解明を目的とする。梅園研究史においては、△条理▽と△反観合一▽が重要視せられ、

(6) 夫れ条理は一一なり。一一これを会易と為す。……一一も一一なり。一は即ち一一なり。合して罅縫なし。分れて条理有り。

○『復高伯起書』)

という、より基本的な八一―Ⅰ或いは八含易Ⅰの意義は、ほとんど解明されていない。すでに述べたように、八含易Ⅰを「陰陽」と同一視することは許されない。勿論、伝統的な陰陽論の三浦梅園への影響を無視することもまた許されることではない。八含易Ⅰと陰陽との関連、それこそ独立学派梅園に、正当なる思想的位置付けを与える鍵となるであろう。

本稿で使用或いは関連する諸稿本とその成立年代を示しておく。

○第一期初稿時代

- ・宝曆三年癸酉（一七五三）
- 『玄論西一』
- 『元炁論西二』
- 『元炁論』（『日本科学古典全書』）
- 『垂綸子西五』
- ・宝曆四年甲戌（一七五四）
- 『垂綸子七戌』
- 『垂綸子九戌』
- ・宝曆五年乙亥（一七五五）
- 『玄語十亥』
- 『玄語仲秋稿』
- ・宝曆六年丙子（一七五六）
- 『玄語乾〇十二』

○第二期再考時代

・明和二年乙酉（一七六五）

『玄語説露』

・明和五年戊子（一七六八）

『玄語例図』

○第三期完成時代・第四期修正浄書時代

・安永四年乙未（一七七五）

『玄語』八冊（『安永本』と略記）

・安永五年丙申（一七七六）

『復高伯起書』

『与弓崎美忠書』

・安永六年丁酉（一七七七）

『答多賀黒卿君書』

・天明七年丁未（一七八七）

『玄語』二冊（次の一冊を合わせて「浄書本」と略記）

・天明八年戊申（一七八八）

『玄語』一冊

草稿本については、田口正治『三浦梅園の研究』（創文社）を参照されたい。

第二節 第一期初稿時代

八一―Ⅰ・八一―Ⅱという数に関する内容は、すでに第一期初稿時代の『玄語』草稿本から存在している。『玄論西一』の「積一」章、『元炁論西二』の「数」章がこれである。ここでは、三稿または四稿と推定される『元炁論』（三枝博音編『日本科学古

典全書』第一卷所収)を見てみよう。

(7)数は無数に生じて、無数になる。……一ははじめてなれるものなり。二は一と一にして、一に對するもの也。……故に一元氣の用や陰陽也。陰陽は二なり。二なるものは、即一と一と也。

△二即一・△一対二△という考え方は、すでにみえるが、第二期再考時代以後によくみえる「對立する一と一」はまだ希薄である。注目すべきは、「一元氣の用や陰陽也」である。梅園は、△一元氣△を体、△陰陽△を用と考えている。これは明らかに朱子学の体用論理を踏まえている。

次に『垂綸子』。これは同題名の『西五』・『六戊』・『七戊』・『八戊』・『九戊』の五草稿があったと思われるが、現存するのは、『西五』・『七戊』・『九戊』の三稿である。最後の『垂綸子九戊』によると、

(8)一元氣は一なり。倉易は二なり。一は一の混として跡無きなり。二は一の然然として乱る可からざるなり。……倉易は一一の各名なり。

(9)二は一の相對するなり。
天地は以つて形と為す。而して天地は形の倉易なり。動靜は以つて機と為す。而して動靜は機の倉易なり。明暗は以つて色と為す。而して明暗は色の倉易なり。

△倉易△は△二△である。△二△△一△が相對しているもので、△一△△おのおのの名が△倉易△である。『元氣論』ではまだ明確でない「對立する一と一」という考え方があらわれている。

(10)で、「倉易は一一の各名なり」の意味が明確になる。△天地△

という△倉易△は△形△に統合される。△動靜△と△機△、△明暗△と△色△も同様である。この時期、梅園は、「天は形の無いもの」、「地は形の有るもの」と定義している。従つて、△形△という観点からすれば△倉易△は△天地△であり、同様に△機△という観点では△倉易△は△動靜△であり、△色△という観点では△倉易△は△明暗△である。

ところで、△天地△・△動靜△・△明暗△が△倉易△であるとは、一体どのような意味だろうか。△倉易△は、何かある個物を意味するものとは考えられない。具体性を捨象した「關係」を表示していると考えられる。

(11)倉易は一一の各名なり。故に其の勢なるや併し、其の跡なるや反す。

△倉易△は、△一△の名である故に、△勢併△かつ△跡反△である。逆に考えれば△勢併△かつ△跡反△という条件を満足すれば、△倉易△である。梅園が多用する△日影△を例に取つてみよう。

古来、日に対するに月を配した。梅園はこれに反對する。日、すなわち太陽が出れば照らし氣温が上昇する。日は明と熱を放つ象である。日と△倉易△關係にあるものは、逆に明に対して暗、熱に対して寒でなければならぬ。これが△影△である。△影△は暗寒の氣である。△日影△、いずれか一方の勢力がまさつていれば、一日中、昼または夜だけになる。そうならないのは、△日影△の勢力が釣り合っているからである。人が認識できるものは△日影△そのものではなく、明熱の象や暗寒の氣という△跡△である。△跡△は正反對である。だから、△一△關係において一方を△日△とすれ

ば、もう一方は△影▽である。

では、日と月は△一▽関係でないとすると、どのような関係なのか。『玄語・乾〇十二』^⑧には、

(12) 正は反して合す。傍は彼即ち对有り。此また傍より対を為す。

剖析は一おのおの二を具す。錯綜は形氣を同じくして天地会易反す。交互にして反は形氣を反す。交互にして正は形氣を同じくす。正対にあらずと雖も往くとして対にあらざるもの無し。

(13) 將に文章の条理を知らんと欲すれば、すべからく對待を繹めべし。対は反を正とす。然して傍有り、剖析有り、錯綜有り、交互有り。

△対▽に五種類ある。△正▽・△傍▽・△剖析▽・△錯綜▽・△交互▽に分類する。△日▽を中心例にして説明すると、△日影▽は△正対▽、△日燥▽は△傍対▽、△日火▽は△剖析▽、△日水▽は△錯綜対▽、△日湿▽は△交互反對▽、△日月▽は△交互正対▽、となる。ここで△正▽・△傍▽・△錯綜▽・△交互▽に△対▽をつけ△剖析▽にそうしないのは、『玄語』草稿中の「図説」の章の各図の題名に従った。

前述したように、△日影▽は△一▽関係である。だから、△一▽は、△對待▽のなかでも△正対▽であることがわかる。この場合の△正▽は、誤に対する正ではない。

第三節 第二期再考時代

第二期の『玄語』草稿本で残存しているのは、『玄語例図』と『玄語説露』の二冊である。『玄語例図』には、

(14) 説露一篇、条理は氣物に在り。説没一篇、条理は事物に在り。とあり、この時期の『玄語』の構成は、『説露』冊、『説没』冊、『例図』冊の三巻本であったと思われる。

『玄語説露』によると、

(15) 一の未だ其の名を得ず。故に一一なり。一一の已に其の名を得る。故に會會なり。氣物の未だ其の名を得ず。故に氣物なり。氣物の已に其の名を得る。故に天地なり。

△一▽と△會易▽、△氣物▽と△天地▽が、△異声同主▽であるということが強調される。△一▽が名を得れば△會易▽、△氣物▽が名を得れば△天地▽である。

引用文(16)では、△天地▽は△形▽で統合される△會易▽関係であった。

(16) 一は氣物の性なり。氣物は一一の体なり。……一一を會易と為す。會易は性なり。氣物を天地と為す。天地は体なり。

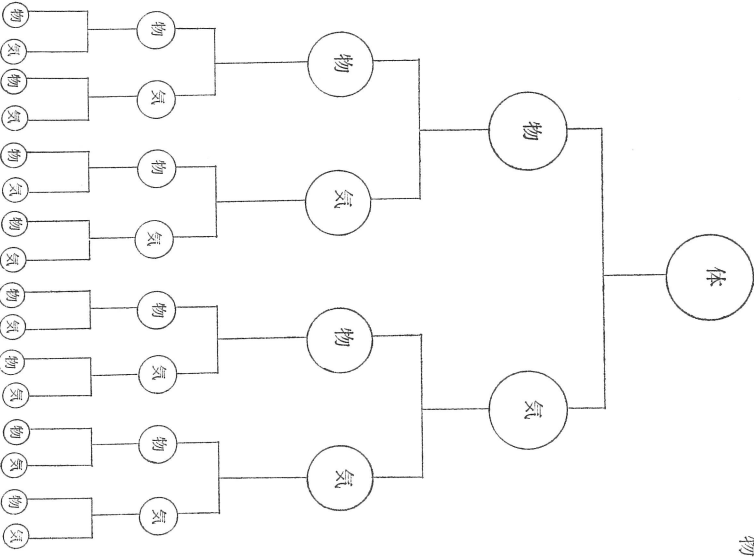
△正対▽の関係にある△天地▽・△動靜▽・△明暗▽等は、すべて△會易▽関係と表現していたのであるが、ここでは△會易▽を△性▽という特定の側面で限定することにより、新たに△体▽という特定の側面を設けなくてはならなくなったと思われる。

A 図は△一▽図、B 図は△氣物▽図、両図とも『玄語例図』中にある。

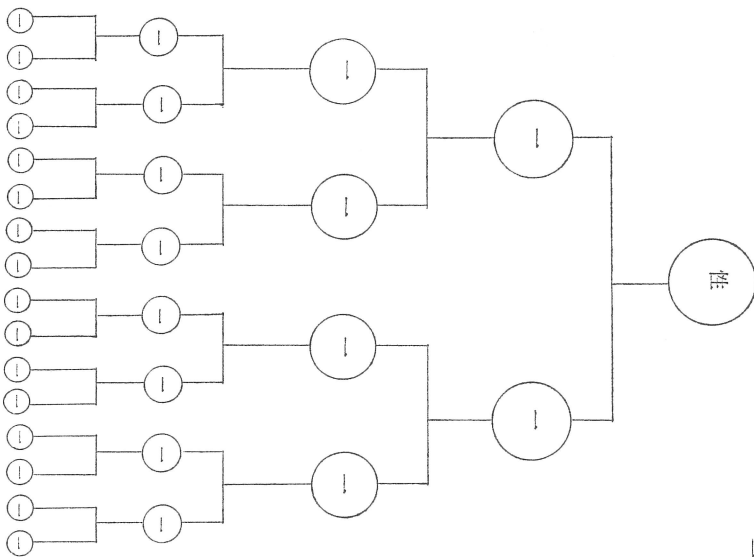
A 図最上段の△性▽は、もと△一▽と書かれていた。この△一▽は、

(17) 一は状し難し。亦名づけ難し。強いて状して玄と曰い、強いて名づけて元氣と曰う。

。B 图
气物



。A 图
一一



という△玄なる一元氣▽を指す。この△玄なる一元氣▽は表現し難い。もしこの元氣を△一▽と表現すると、

「玄なる一元氣」は実は名状し難い最も総括的な存在である為に名状すれば二の次元に落ち玄ではなくなる。

(17)とも、筑摩書房『日本の思想』第18巻所収、高橋正和・訳注「玄語」189ページ)

△二▽の次元に落ち、△正対▽するもう一方の△一▽を必要とする。それが△体▽である。この時期、梅園はすべての物——現象を含めた存在——を△性▽と△体▽の両面で考えていたと思われる。だから、A・B両図は、『安永本』や『浄書本』の図法に従えば、二図一組という意味での「性体図一合」または「一元物図一合」と表記できる。

ところで、前節で△一▽関係の成立条件として△勢伴▽と△跡反▽をあげた。

(18)夫れ舍易は一なるのみ。一一は物異なりて居を同じくする者なり。

ここでは、△異物▽と△同居▽である。また△異物▽にかえて△反物▽も見える。このほか、『玄語説露』には、

(19)力均しくして跡反す。有ること同じくして発すること異なれり。

とあり、△勢伴▽の訂正である△力均▽と△跡反▽に加えて、△有同▽・△発異▽があげられる。これ以外にも、単独で△居同▽と△道異▽が使われている。前節では△日影▽を例にあげたが、ここでは△水燥▽を例にあげよう。

(20)試みに水注みづがしを製するを觀よ。必らず二孔を鑿がつ。一孔は氣を通し、一孔は水を通ず。一勺の水を出せば一勺の氣を納る。水

ぎ尽くれば則ち氣充ち、氣出でざれば則ち水入らず。故に地なる者は皆天なり、質ならざる者は皆氣なり。已に質と相拒んで相居らず。水、門戸を以って出入すれば則ち氣も亦門戸を以って出入す。已に空、已に無。出入、豈に門戸を以って為さんや。已に門戸を用う。已に物と居を争う。巖然として充ちて且つ有る者に非ずや。有りと雖も闕として声臭こゝろ無し。是れ氣の謂いなり。……物、水に入れば則ち濕、此に在れば則ち燥なり。能く水と物を反す。故に此に名づけて燥と曰う。其の水と相拒むを觀れば則ち氣と雖も体有り。体有る者は処を得て居る。今、此体に空なりと雖も、空以って体を成し、已に処を得て居り、已に物と処を争う。氣も亦物なり。

氣は、体において空、質において無であるが、氣においては空でも無でもない。水は、体において充、質において有であり、従って物である。氣は水と占有する空間を争う。故に、氣は物の条件である空間を占有するという点において物と言える。梅園は、この氣を新たに△燥▽と命名する。△水燥▽は、同一空間(ここでは水注の内)にあって占有する空間を争うが故に、正反対の物である。

次に、△對待▽についてはどうか。前節の五種はすべてであるが、△対▽字がつけれなかった△剖析▽が△對待▽と並べて使用されている。

(21)よろしく對待を以って反觀すべし。よろしく一一に就いて剖析すべし。

△對待▽が対立を意味するのに比較して、△剖析▽は△分▽すなわち△一▽から△二▽への流れを意味する。梅園流に表現すれば、△對待▽は△緯▽、△剖析▽は△経▽である。△剖析▽に△對▽字をつけなかった理由は、最初からこのような意味の違いがあったからであろう。

第四節 第三期完成時代および第四期修正浄書時代

田口正治博士の『玄語稿本之研究』によれば、『安永本』は第三期完成時代、『浄書本』は第四期修正浄書時代、として時期区分を設けるが、本稿においては一緒に扱う。△一▽の条件および△對待▽の分類が両稿本に共通であること、また、『安永本』八冊の内、「本宗」・「地冊没部」・「地冊露部」の三冊が訂正加筆され『浄書本』になるのであるが、残り五冊にも『浄書本』の特徴を示す訂正加筆があり、従って両稿本を分離して考察することは不可能であること、が一緒に扱う理由である。

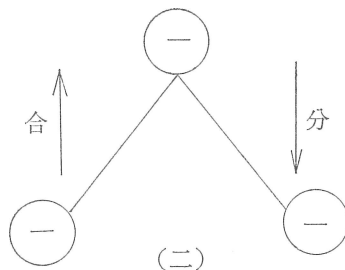
この時期の△含易▽も、第一期初稿時代・第二期再考時代とさほど変わり無い。特に、第二期とほぼ等しい。

(2) 一は含易の未だ各名有らざるなり。含易は一の定名有るなり。(『復高伯起書』)

(2) 一は含易の未だ各名有らざるなり。含易は一の已に各名有るなり。気物は即ち一なり。一これを含易と謂う。気物これを天地と謂う。(『贅語二含易帙上』)

(2) 一を以って居を同じくす。二を以って道を異にす。分を以って気を均しくす。合を以って物を反す。
(2) 象立すれば則ち一一平分し、混成すれば則ち一一相融す。平分すれば則ち彼此の発は同じからず、相融すれば則ち彼此の有は異ならず。(2)とも『玄語本宗』)

C 図



C 図の△一即一一▽模式図を参照して考えてみよう。△一一▽関係のものは、統合の△一▽の次元において△同居▽する。△一▽より△一一▽へ至る経路は異なる。分かれるからといって、気は別ではなく均しい。合するからといって、物は同じでなく反している。象然と分立すれば、△一一▽は平等に分離する。混然と円成すれば△一一▽は融合する。平等に分離すれば△一一▽次元での発現は

じでなく、融合すれば△一▽の所有するものは異ならない。△發不同▽と△有不異▽は、引用文(19)中の△發異▽と△有同▽と同意味である。

以上、六種あげたが、この時期の『復高伯起書』には、△均力▽・反跡▽も相変わらず使用されている。

(20) 一は本一、一は即ち一一なり。合して罅縫無く、分かれて条理あり。而して其の態なるや居を同じくして道異なり、力均しくして跡反す。

注目すべきことは、△一一▽が対立する△一▽と△一▽という意味だけでなく、明らかに△一一即一▽を前提にしていることである。たとえば、△昼夜▽は地表のある一地点に見られる△日影▽である。地表を離れて、つまり視点を宇宙に移動して△昼夜▽を見れば、同時存在——東半球が昼ならば西半球は夜となる——である。

だから、△一一▽関係である△昼夜▽は、すでに△即一▽を前提とする。梅園流に表現すれば、△昼夜▽はそれぞれ△半天地▽存在であり、合して△全天地▽存在となる。

次に、△對待▽に關してはどうか。

(21) 對に反有り、比有り、互有り、汎有り。(『安永本・例旨』)

(22) 對に反比有り。反を正と為し比を傍と為す。(『復高伯起書』)

(23) 正偶は反し、傍偶は比す。日影水燥は偶の正なり。日月水火は偶の傍なり。

(『安永本』及び『浄書本』の『地冊露部』)

△對待▽には△反・比・互・汎▽の四種類がある。△剖析▽は△對待▽からはずされているので、前節と同じ四種類となる。記述上からは、△正▽↓△反▽、△傍▽↓△比▽、△交互▽↓△互▽、△錯

綜▽↓△汎▽と推定できる。しかし、それぞれの△對▽の具体例を見ると、この推定が誤りであることがわかる。

(24) 比は反の偶なり。反を謂えば則ち此に有る者彼に無きなり。比を謂えば則ち此に有る者彼に有るなり。(『安永本・例旨』)

(25) 日地は正比なり。熱を以て寒に偶す。日本は傍比なり。潤を以て乾に偶す。(『安永本・天冊活部』)

△反▽と△比▽が特に重要視される。そして△比▽にも△正▽と△傍▽があるとされる。ここで△傍比▽である△日水▽は、第一期および第二期においては△錯綜對▽であった。また、引用文(26)中の△日月▽は同じく△交互正對▽であった。このような△反比▽の具体例を考察すれば、

反||正

比||傍・錯綜・交互

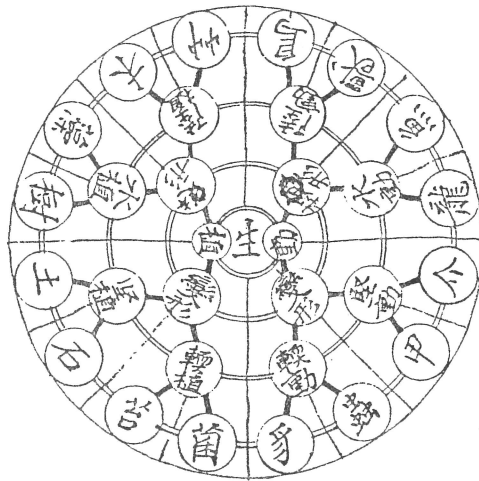
となる。△反▽は、△反為正▽とされているようになっての△正對▽であるが、△比▽は△比為傍▽とされながら、かつての△傍對▽のみならず△錯綜對▽や△交互對▽をも含んでいる。引用文(26)中の△互▽と△汎▽は、全く具体例を欠くので意味は不明である。

第五節 △含易▽と△一一▽

三節にわたって三浦梅園の△含易▽・△一一▽論を考察してきた。それは、△對待▽と△一一▽の条件とから構成されている。△一一▽は、直接に何であるかというよりはむしろ存在・現象を關係づけるための論理であると解釈できる。△一一即一一▽には、

△一▽から△一一▽が発生するという順序関係は全くない。ここで『玄語』中の「動植分合總図」をみてみよう。

動植分合總図



図によると、△生▽という△一▽からは、△動植▽が△一一▽として分類される。△動▽を△一▽とすれば、△本形▽と△変形▽が△一一▽である。△本形▽を△一▽とすれば、△陸動▽と△水動▽が△一一▽である。△陸動▽を△一▽とすれば、△鳥▽と△獸▽が△一一▽である。結局、△一即一一▽は存在を分類し体系化するための抽象的な関係の形式である。この図では、△倉易▽よりは△一

一▽の方がふさわしい。土石を含めたこのような伝統的本草学の分類が、分類論理としての△一一▽の根拠である。いわば経験科学的根拠である。しかし、△倉易▽論にはもう一つの根拠があると主張する人があるかもしれない。

②今の世、実測と推歩と漸く精しければ則ち其の形を知るにおけるや頗る熟す。頗る其の形に熟すと雖も、而も未だ天地の然る所以を審かにすること能わざるは何ぞや。倉易の故に罔きを以つてなり。夫れ倉易は對待の一一也（『安永本・例旨』）

理氣二元論を中核として一大思想体系を構築した朱子は、理を「所以然の故」と「所当然の則」とする。陰陽とは氣、すなわち形而下の器であり、形而上の道としての理は陰陽の所以の理である。梅園の△倉易の故▽とはまさに「所以然の故」を受け継ぐものである。しかし、梅園は朱子と異なり、△玄なる一元氣▽という氣一元論で世界を構造化する。その意味で、△倉易の故▽は形而下の器である。梅園は、朱子の理氣論を否定的媒介として継承しているのである。引用文(1)の

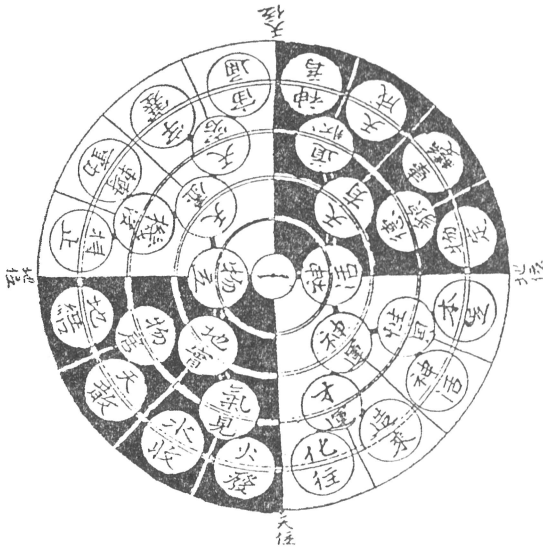
蓋し倉易の目は易において始めて見ゆ。然して其の謂う所は、或いは道と曰い……

は、両者の決定的な相違を物語っている。私は、朱子により集大成された中国伝統の陰陽論の梅園に対する影響を決して否定するものではない。梅園においても、水||倉・寒、火||易・熱、なのである。陰陽論は、梅園の単なる、それでいて重要な出発点であると考ええる。

第六節 \wedge — \vee と \wedge 条理 \vee

梅園は \wedge 俗習之弊 \vee を斥け、現実があるがままに観察しなければならぬとする。現実は一見したところ分から難く織り合わされた \wedge 一匹の錦 \vee のように見える。それに対して、梅園は各個別を考察し、全体構造に占める位置を精密に規定する。個別間の関係形式

神物剖析図 天_一仲乃天_二冊_三所_レ読
 天地乃地_二冊_三所_レ読



\wedge — \vee により把握される部分系を相互に結合し、現象や存在全体の完全な像があらためて形成され、眼前に示される。現実世界の単層性という感性的見せかけは、 \wedge — \vee なる関係の低位秩序から統合の \wedge — \vee へ、更に \wedge — \vee を \wedge — \vee 関係の \wedge — \vee として他方の \wedge — \vee と統合してより上位の \wedge — \vee へ、という思考を重ねることにより、関係の上位秩序へという厳密に概念的な構造的体系に取ってかわる。現実世界の諸存在はもはや無関連に並存しているのではなく、円図で表現される \wedge 支語図 \vee の中心の周囲に整序される。

この中心の \wedge — \vee なる \wedge 支なる二元氣 \vee は、関係形式 \wedge — \vee により定立されるすべての類概念の性質を抱撰する。つまり、根源的な \wedge — \vee の無限定無規定性は、現実世界の多様性として開顕する。 \wedge 支なる一元氣 \vee になんらかの形があり従って定義可能なものであるならば、万物を統合する \wedge — \vee にはなり得ない。しかし、この \wedge 支なる一元氣 \vee は同時に現実性を保有しなければならない。

一不_レ上_レ図（『支語』の最初の白紙の図）

この現実性が \wedge — \vee たる \wedge 舍易 \vee と \wedge 天地 \vee である。 \wedge — \vee 即 \vee は、現実世界の部分系の関係形式としてその正しさを保証されている。だから、 \wedge 支なる一元氣 \vee の \wedge 性体 \vee 的観点、つまり \wedge — \vee の次元における \wedge 舍易 \vee ・ \wedge 天地 \vee が定義可能であり且つ現実性を保有しているならば、 \wedge 支なる一元氣 \vee は統一存在として非定義的でありながら、 \wedge — \vee の論理的帰結に従って必然的にその現実性を有することになる。

一元の気は唯一氣一物を認む。而して氣物は天地なり。一一は
 舍易なり。
 (『与弓崎美忠書』)

経緯剖対図

という文章は、 \wedge 玄なる一元氣 \vee が定義不可能でありながら現実性を保有するというを示している。

関係形式 \wedge 一一即一 \vee を何かある個物というふう具体的に物と考えるならばその固有の意味を失ってしまう。故に、 \wedge 一一 \vee の別表現である \wedge 舍易 \vee に関して、 \wedge 舍 \vee とは何か、 \wedge 易 \vee とは何か、と問うことは形式と概念を混同することになる。引用文(1)は、このことを述べていると考えられる。

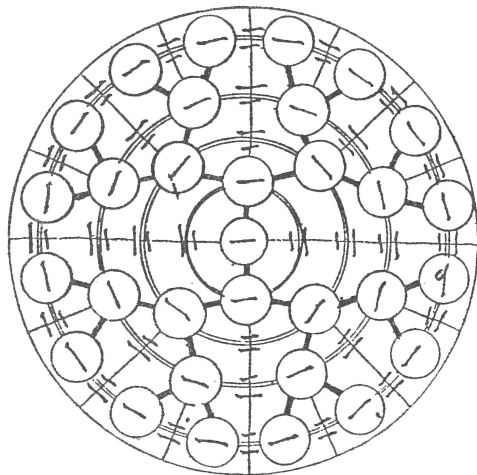
さて、関係形式 \wedge 一一即一 \vee を、梅園は \wedge 条理 \vee の最小単位とする。

(3)条理は一一なり。分れて反す。合して一なり。

(『安永本・例旨』)

(4)一一は舍易なり。これを条理と為す。(同前)

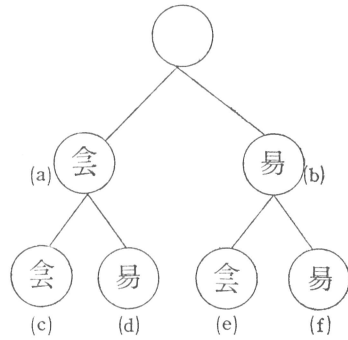
\wedge 条理 \vee 本来の意味は、 \wedge 条實理析 \vee と言われる如く、 \wedge 一元氣 \vee より個別に至る \wedge 一一即一 \vee の全体の関係系列である。たとえば \wedge 経緯剖対図 \vee 、これは個別性を一切捨象した系列図にほかならない。 \wedge 動植分合総図 \vee 、これは個別そのものの系列図である。この図における \wedge 動 \vee ・ \wedge 植 \vee ・ \wedge 本形 \vee ・ \wedge 陸動 \vee 等は、明らかに類概念である。この二図からは、 \wedge 舍易 \vee が全く感じられない。梅園の類概念は単なる合成、つまりただ単に類似を合成するものではない。類概念の成立には、 \wedge 一一 \vee の成立条件を満足するという論理的補全の作業が必要なのである。



第七節 おわりに

三浦梅園の基本的論理である \wedge 一一 \vee を、第一期より第四期に至る諸草稿本によって考察した。『安永本』以後の整理された内容によれば、 \wedge 對待 \vee を大きく \wedge 反 \vee ・ \wedge 比 \vee の二種に分ける。 \wedge 反 \vee とは、 \wedge 一一 \vee 、つまり正しい \wedge 舍易 \vee 関係にあるものについてのみ使用される。

D 図



D 図で言えば a b · c d · e f がそれぞれ \wedge 反 \vee である。c e · c f · d e · d f は \wedge 比 \vee である。

また、 \wedge 一 \vee は \wedge 即一 \vee を言外に含む。 \wedge 一 \vee は満足すべき条件——一 · 二 · 分 · 合という四観点の厳密性を必要とする——がある。これを満たしたとき、はじめて \wedge 反对 \vee と言えるのである。 \wedge 即一 \vee を含む \wedge 二 \vee を \wedge 条理 \vee の最小構成単位とする。 \wedge 条理 \vee は、

(39) 此の書の業は条理に在り。杜撰なりと雖も、旧称無き者は新たに名を命ず。類を分かつ者は、専ら条理に由る。

(『安永本・例旨』)

といわれることでもわかるように、分類の論理である。分類を逆に、すなわち \wedge 即一 \vee \wedge 即一 \vee とたどれば、存在の全体——統

一存在——である \wedge 玄なる一元氣 \vee \wedge 到達する。 \wedge 玄なる一元氣 \vee は、統一存在であるがゆえに定義不可能でありながら同時に現実性を有しなければならぬ。『玄語』の内容が、 \wedge 二 \vee レベルの \wedge 天地 \vee と \wedge 倉易 \vee で充滿しているのは、 \wedge 玄なる一元氣 \vee の現実性を証明するためである。

〔注〕

①草稿本の時代区分は、田口正治前掲書所収「玄語稿本之研究」に おおむね準拠する。詳細は拙稿「玄語写本の研究」(『梅園学会報』第六号)を参照されたい。また、本稿の引用文は、『日本科学古典全書』を除いては、すべて梅園自筆本に拠る。

②現存の『玄語』草稿本では、第七稿『垂綸子七戊』の朱筆訂正で初めて \wedge 倉易 \vee が出現する。従って、ここではまだ「陰陽」が使用される。

③島田虔次『朱子学と陽明学』によれば 定義としては、きわめてばくぜんとしているが、「体とは根本的なもの、第一次的なもの、用とは派生的なもの、第二次的なもの」ぐらいに考えておいてよい。実体と作用、本体と現象、と考えても、それらの概念規定にあまりに神経質にならなければ、さしつかえない。

④『梅園全集』所収『垂綸子』は、『七戊』の後半、『大分県史料』所収のものは『九戊』の前半である。

⑤東北大学狩野文庫所蔵の写本を、梅園自筆草稿本と校合のうえ、使用する。

⑥ 訳語は、高橋正和・訳注「玄語」を参考にしている。

⑦ 島田虔次氏は、「三浦梅園の哲学——極東儒学思想史の見地から——」において梅園哲学の見とり図として

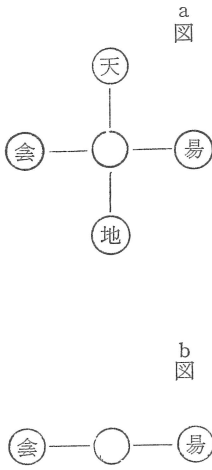
一元氣(玄)、もしくは、気。

含易モデル——条理。反観合一。一有二、二開一。(気物性体)

天地モデル——天機性体。天地、動物植物など万物、人。

をあげる。これは基本的な誤りである。梅園においては、△天
地▽もまた△含易▽である。△玄語図▽によれば天∥白、地∥
黒、で示されているが、この意味は、白∥含、黒∥易。(『玄語
手ひき艸』)である。

ここで注意すべきは、△性▽としての△含易▽と△体▽として
の△含易▽を混同してはならない。梅園には、△性▽観点の△含
易▽ないし△一一▽と、△体▽観点の△含易▽ないし△一一▽が
あるのである。それを示すのが、△天地▽の材料たる△気物▽を
定義する「気物は即ち一一なり」(引用文②)である。



c 図



b・c二つの軸を合わせるとaになる。『玄語』が難解であると
評される理由の一つは、二つの△一一▽軸が隙間なく混在してい
るからであろう。